

あなたの罪は赦される

ダニエル書9：9

マルコによる福音書2：1～12

イエス様一行は再びカファルナウムに戻ってきました。ガリラヤにおいてはそこが拠点であったのでしょうか。ペトロの姑の家もあったことですし。この度もある家でイエス様がお話しをされていましたが、そこがペトロの姑の家であったかどうかはわかりません。ただイエス様に対して友好的であった信者の家であったのかもしれませんが。今日で言うなら家庭集会みたいなものであったのでしょうか。しかし今日私共の一軒家と言いますのは、平屋においても大抵が、今や寝室、台所などいくつかの部屋があるかもしれませんが、当時のその地方の家は平屋で広間が一つであったようです。そこですべて生活していたのでしょうか。でも私も、いくつか部屋があったとしてもひとつの部屋以外あまり使わないことが多いような気がします。イエス様はそこに招かれて、み言葉を語られました。神様の業、愛、戒めなどを聖書（今日の旧約聖書）に基づいて語られていたのです。そこにたくさんの方が集まってきて戸口まで一杯で入りきれないほどでした。家庭集会や教会の集会もこのくらい一杯なら嬉しいのですが。

そこへ四人の男が中風の人を運んできました。中風というのは手足を自由に動かすことができませんので、人に介護してもらわなければここまで来れなかったのです。病人を床の上に寝かせて、四隅を持って運んできたのです。彼らがここまで来たというのは、この中風という病気をイエス様に癒してもらうためでした。勿論病人の本人も望んだことでは、何よりもこの四人がイエス様の力を信じていたからでした。この四人は病人の友人であったのでしょうか。ところで「友人」という言葉は聖書の言葉では「愛（友愛）」です。数日前、夜テレビを見ていたら、「友人とは誰か」「友人と親友はどこで区別するか」などをテーマにしている番組がありました。そこでは役に立ったり、楽しかったりするのには「友人」だけど、心の底からその人の幸せを願い協力するのが「親友」だ、とか長い期間の付き合いで苦楽を共に経験して友になるみたいな結論でした。この四人は自分の友をどうしてもイエス様に*み*てもらい癒してもらいたかったのです。そのために家まで運んできましたが、戸口まで人が一杯で入れませんでした。彼らも「ちょっと入れさせてくれないか」「どいてくれ」など言ったかもしれませんが、人々は聞いてくれなかったのでしょうか。人々は自分の好奇心やイエス様の話を近くで聞きたいために、中風の人を通すことには無関心であったのです。もしそこでこの世人が諦めたなら普通の友人であったかもしれませんが。しかし彼らは違いました。チャンスは今しかない、何とか中に入れよう。イエス様を確信していたことでもあります。どうしてもこの友である病人を中に入れたいという強い思いがあったのです。彼らは機転を利かせました。私どもの家は所謂切妻のような形が多いかもしれませんが、この地方の家の屋根は平らです。今の時期、台風がよく沖縄がテレビに出ますが、あちらの屋根は結構平らなのが多いのであやう感じかなと思いました。パレスチナの家にはそれに外階段が付いていて、屋根に上がれるようになっていたのです。上で昼寝でもするためだったのでしょうか。よし、人に家の屋根だが、壊しても中に入れてしまおう、後で自分たちがどうにかしようと考えました。四人の男たちは、病人を屋根の上にあげ、床に載せて天上から吊り下げたのです。イエス様はその四人の信仰を見て、中風の人に向かって「子よ、あなたの罪は赦される」と罪の赦しの宣言をされました。その当時は、悪い病は過去の罪に由来するというように考えられていたのです。それに対して律法学者たちは心の中で「あいつは何という不敵なことをいうのだ。罪を赦すというのは神お一人にしかできないではないか」とつぶやいた。律法学者というのは、規定に従って正しいか正しくないかを判断するのが仕事であります。ここでも「神さまお一人が罪を赦すことができる」というのは正しいことです。ただ問題は、彼らが正しいことを悪意を持って考えたり言ったりしていることです。悪意を通すために、正当なことを主張するというものです。彼らは考えます「口先ならどんなすごいことだっていくらでもいえるではないか。たとえ神様の領分に関することであっても。」確かに「あなたの罪は赦される」と断言されてもそれは目にははっきりと見えない。しかしもし体の病が癒されたならそれは目で確認することができるのです。彼らは目で見て分かることを重視して、見ないで信

じることができなかつたのです。確かに今日でも、証拠を観なければあるいはエビデンスがなければ受け入れられないというのは現実にあります。ただたとえそれがなくても、信仰によって受け入れることがあるのです。もしかするとそれは妄信と言われるかもしれない。そうではなく、ただ全能の神になら、その権威を有した者ならば人知を超えたところでの出来事が起こる可能性を否定しないということです。

とにかく罪の赦しの宣言は神の権威によるものであり、それを口にするのは大層不遜なことであるのは確かであり、簡単に口にするのはいけないということは律法学者のいうとおりに正しかったのです。それを口にするのは、体の癒しよりも上のレベルにある権威によるものであったのです。ただ実際に考えてみると、たとえ上の権威にあっても、実際に確かめることができるのはより下のレベルの体の癒しであるのです。律法学者は心の内でつぶやきます、「口では大層なことをいうが、では実際にその中風を癒すことができるものなのか、できないのではないか」と。それに対してイエス様は、彼らの心の内を見抜いて、罪の赦しと体の癒しはどちらが易しいか、と逆に問い返します。そしてイエス様は中風の人に命じます「わたしはあなたに言う。起き上がり床を担いで家に帰りなさい」と。この言葉によって病人は癒され床を担いで歩き出したのです。イエス様は罪の赦しの宣言よりも体の癒しが易しいということ、それは口先だけではないということを証しされたのです。そして律法学者たちの心の中にある悪意をめぐり出して責めたのです。イエス様は病人に対して起き上がるだけでなく床を担ぐようにと命じました。その床とはこの病人がイエス様に会うまでに煩った辛い過去です。その過去を背負いなさいと言われるのです。人には誰でも消したい過去や思い出したくない過去があることでしょう。それが自分では消しきれないトラウマになっていたり、背負いきれなくなっていたりすることがあります。しかしイエス様は神様の権威によってそれを背負いことができるようにしてくださる、或いはイエス様が共に背負って下さるのです。

先程も言いましたが、身に起こる病は過去の罪によって引き起こされる、と当時は考えられていました。つまり過去に自分が罪を犯したからとか、自分の親や先祖が罪を犯したためであるとの見方でした。ヨブ記を見ても、ヨブに降りかかる災難に対して友人たちは彼が罪を犯したからだと言っているのです。それに対してヨブは頑なにそれを否定して、その不条理を神様に訴えます。

体の病や精神の病が自分の罪、或いは先祖の罪かどうかということは、ただそれだけではなく、他人の罪社会の罪が関係していることもあると言えるのではないのでしょうか。環境汚染や有害な添加物による体の病や、乱暴な言葉や扱いを受けたことによる心の病など、いやそれだけでなくもっと深いレベルでの社会の罪、人類の罪が個人に皺寄せとして襲いかかって現れることがあるのではないのでしょうか。人々の罪が、弱い人に押し付けられる。イザヤ書 53 章は苦難の僕のモチーフですが、人の病と苦しみを担った僕が詠われています。「・・・彼は軽蔑され、人々に見捨てられ 多くの痛みを負い、病を知っている。彼はわたしたちに顔を隠し わたしたちは彼を軽蔑し、無視していた。 彼が担ったのは私たちの病 彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに わたしたちは思っていた 神の手にかかり、打たれたから 彼は苦しんでいるのだ、と。」(イザヤ 53 : 3, 4)

人類の罪、病を私どもに代って背負ってくださるお方がおられる、それが神の子イエス・キリストであります。四人の友人の信仰と計らいによって救い主イエス・キリストに会うことができ、癒された中風の方は、自分の過去を背負って人々の前を歩いて家へと向かいました。その人の床を見て、人々はこの人が癒されたことを驚きをもって、我を忘れた等に讃美しました。信仰は奇跡に繋がりそれは神讃美になるのです。

癒された中風の方が向かうのは自分のいた場所である家です。そこには長年共に苦しみを覚えつつ生きてきた家族がいたことでしょう。彼が床を担いで戻ってきたときに家族も喜び、先ほど見ていた人々以上に驚きをもって神を讃美したに違いありません。四人の執り成しの思いとイエス様に対する信仰が一人の癒しを起こさせ人々にイエス様への驚嘆と神讃美を起こし、そしておそらく家族へ福音の喜びが伝わったことでしょう。